

# 日本、中國の治水説話

波多野鹿之助

上章 1、日中の代表的治水説話（禹の治水伝説と八岐大蛇退治神話）の世界洪水説話における位置——洪水型と治水型、

2、日中の治水説話の世界神話伝説における系列——（日）アンドロメダ型（英雄型）（中）ノアの箱舟型（有徳者型）？

3、八岐大蛇退治神話の本質

下章 1、日本神話と中国神話との特質の相異——歴史的條件の相異

2、日中治水説話と日中社会との關係——地理的條件の相異

結語 1、両説話の今日的意義——洪水社会より治水社会を経て、利水社会へ。

## 上章

こゝに論じようとする対象は禹の治水伝説と我が国における代表的治水神話と見なされる素戔鳴尊の八岐の大蛇退治神話の二つである。

さて、所謂「洪水説話」なるものが、或は文化民族の新旧記録の内に、或は自然民族の言い伝えの内に、種々の形で世界的な分布を示していることは、既に Frazer 氏が *Folklore in the Old Testament* 第一章において詳述されたところであるが、殊にテグリス、エウフラテスの両河地方やインダス河、黄河流域などに文化の黎明期を迎えた東方民

族の間においては、それらの大河の氾濫を反映して、それぞれ洪水に関する神話を持つていたのは極めて自然なことである。

これらの神話は各民族、地方によつて、それぞれの共通性や相異性があるわけであるが、今、これらを小論に必要な範囲において分類すれば、或は(A)洪水型と(B)治水型、或は(I)有徳者型(名君型)と(II)英雄型、に分つことが出来るであろう。(A)洪水型は「ノアの洪水」説話によつて代表されるものであり、この系統の説話は、バビロニア、ヘブライ、ギリシヤ、印度、北歐の各神話にひとしく見出されるものであつて、その起原はバビロニアの Gilgamesh 文書「Pir-Napishim (Urapshim) の洪水」にあると考えられてゐるようである。この Pir-Napishim の洪水説話と Noah の洪水説話とはその宗教的な高さ、叙述の気品においては雲泥の差があるが、その話根においては大体同工異曲のものであり、たゞ、固有名詞や教詞を異にする程度のものであるから、両者の共通点を抽出することによつて、この系統の説話の典型的な話根を次の如く構成することが出来る。

- (1) 太初、神が人間の不敬虔、若しくは悪行を憤ること。
- (2) よつて、洪水を起して之を絶滅させようと決心すること。
- (3) 或る選ばれた者のみを救うべく予め箱舟を造ることを教えること。
- (4) 洪水が起ると選ばれた者が箱舟にさまざまな物をのせて高地に漂いつくこと。
- (5) 水の退き工合を探るために鳩などを放したこと。
- (6) 洪水が退いた後、神を祭り、そして選ばれた者から人類が再び繁殖したこと。

(右の項目は、松村武雄氏が、バビロニア、ヘブライ、ギリシヤ、北歐の四神話における洪水説話の共通話根として挙げられたもの、但、それには第五項がなく、従つて第六項が第五項になつてゐる、松村武雄氏著「神話と歴史」四五―六頁)。

この系統の説話は上述のように、ヘブライ、ギリシヤ、北欧及び印度の各神話に見出され、又ベルシヤにおいても不完全ながら之に近い型のもが見出されるようであるから、我々が旧約の神話、ギリシヤ神話、Edna (北欧) Veda (印度) Shah Namah (波斯) の名を通じて世界の代表的神話群として親しんでいる神話圏の全域に亙つて見出されることとなり、従つてこの型の洪水説話を標準的なものと見なすならば、日中の洪水説話の如く、この型といちゞるしく相異なつたものを、特殊型と見なす事も亦、可能であろう。そして、又、前者が人類の罪障とその再生という宗教的な觀念を主題として、洪水を説いて治水を説かず、後者はそれに対して名君、又は英雄による治水を主題としているという点において、前者を(A)洪水型、後者を(B)治水型と分類することも出来よう。又、ノアの洪水説話や禹の治水説話がノア、禹の如き有徳者(名君)を主演者としているのに対し、八岐の大蛇退治説話が素戔嗚尊という英雄を主演者としている点において、前者を有徳者型、後者を英雄型と分類することも出来よう。

以上によつて、我々は先ず中日の洪水説話が、一つは(B)治水型(I)名君型説話に属し、一つは(B)治水型(II)英雄型説話に属するものとして、その文化民族間の洪水説話中に於ける大体の位置を把握すべきであらう。

次に少しく洪水説話という立場を離れて、この両説話が世界の神話の中の、如何なる類型に属するかを考えて見よう。八岐の大蛇退治が *Andromeda* 型説話の系列に属することは既に先人の説かれたところであつてこの説話の話根

(1) いきにあの乙女を喫う怪蛇の災害

(2) 王姫の身に迫る人身御供の危難

(3) 英雄の出現による怪蛇退治と英雄と王姫との結婚。

*S. Baring Gould* の分類による *Wundt* の分類のヘラクレス型 (*Heraklestyus*) に当る。

神説が岩見重太郎沸々退治伝説などと共に、日本における代表的アンドロメダ型英雄説話の系列に属すべきものであることは言うまでもなからう。

然らば、禹の治水伝説は之を如何なる系列に属せしむべきであらうか、之を考えるためには、先ずこの伝説の大略を復習しておく必要がある。

禹の洪水伝説が中国伝説上に占める位置はすこぶる重大であつて、この説話の大略や片鱗は多くの文献に散見している。そしてこの説話は二つの異なつた系列を持つているところに中国神説伝説の一特色が示されている。一つは主として、儒教的立場から解釈された政治道徳的色彩の濃いものであり、書経の虞書、夏書。史記の夏本紀。孟子の滕文公篇などに記されている（a）儒教型。一つは楚辭、天問篇。山海経、海内経。淮南子、斉俗訓、墜形訓。等によつてうかゞわれるところの神話的思考法によつて話られた（b）神話型である。禹の治水伝説は言うまでもなく（a）儒教型によつて、あまねく人口に上つている訳であるから、先ず（a）儒教型の説話を手掛りとして、その神話的形態を摸索して見よう。

堯の時に当り、洪水天にはびこり、浩々として山をつつみ陵にのぼり、下民はなげき憂いていた。堯は四嶽たちのすゝめにより鯀を用いて治水に当らしめたが九年にして水は息まなかつた。そこで堯はまた別にその人を求めて舜を得た。舜は天子の政治を代行し、巡狩して鯀の治水の無状なるを見、之を羽山に殛し鯀の子、禹をあげて鯀の業をつがしめた。

禹は智徳を兼ねた聖人であつたが、その身を勞し、その思いを焦し、外に居ること十三年、家門を過ぎても敢て入らず、九州を開き、九道を通じ九沢に堤を築き九山を度り、その成功を告げた。舜は之を嘉し、百官を率いて天下の事を行わしめた、舜が崩じて後、禹が位についた。（史記「夏本紀ニヨル」）

この説話の根幹は堯（舜）の世に大洪水があつて、鯀が之を治めんとして失敗し、禹がこれをついで中国全土の治水と開墾に成功し、遂に天子の位についたということである。然らば治水の立役者、鯀、禹とは原来、何物であるか。

鯨については「鯨、魚也。以魚系声」(説文)とあり、鯨は大魚の一種なりとされている。

「昔堯殛鯨於羽山。其神化為黃熊。以入於羽淵」(左伝、昭公七年)、「堯命夏鯨治水九載無績、鯨自沉於羽淵化為玄魚」(晋、王嘉「拾遺記」夏禹の条)

等がこの推定を裏書きしている。この中で「其神化為黃熊以入於羽淵」という説話が奇怪で解し難いようであるが、再にも亦、その治水中、熊の形と化したという説話があり——「禹治鴻水通轅轅山化為熊」(「淮南子」逸文)

熊は、鯨、禹に通ずる姿態である。熊は三足鼈であるともいうが、これは、或は又、この説話が熊をトテムとする氏族の間に伝承されたものであることを示すものではあるまいか。(北方民族におけるトテムイズムについては現在、北滿州の原住民には、之を認めることが出来る)

然らば禹とは何物であるか、禹が治水中、熊の形に変わった事は上述の通りであるが、又、之を字義の上から見ると九と虫との合字で、九頭の龍であるという。(金文の禹→𪛗)その形が黃河(黃河の一部及びその支流)の形に似ているところから見て、黃河の靈を禹としたのであろう。丁度、上流において多くの支流をあつめ、河口において又、分岐して三角州を作る斐伊川の靈を八岐の大蛇と見なしたのと同じ思考法である。

だが、そうすると禹は黃河を治め山川を定めた下土造成神であり、黃河(の靈)は治められたものであるから、之を同一視することは、素戔嗚尊と八岐の大蛇とを同一視するのと同じであり、治める者||治められる者、という矛盾を生ずることとなる。しかし、之を矛盾と考へるのは現代の思考法を以つて直ちに神話的思考法を牽しようとする考へ方であつて、素戔嗚尊の場合にも、同じく出雲系の神であり、大國主命、又は素戔嗚尊と同質の神と考へられる三輪の大神の神体が蛇体であるところから見ても、素戔嗚尊||蛇神という考へは成立する可能性があり、蛇神崇拜を一特色とする出雲系神話において、その祖神、素戔嗚尊を蛇体と見なすのは十分あり得る事である、従つて素戔嗚尊と八岐の大

蛇とを混同してしまふという事も十分あり得る、同様に治水する禹と治水される黄河（の靈）とが混同される事も決して珍らしい事ではなからう。

我々は「甲は非甲に非ず」という矛盾律に従つて思考する。かゝる思考法に従えば、治水するものが同時に治水される者であるという事は、論理の原則に合致しない。しかし、このように甲と非甲とを峻別する思考法は、社会に階級なるものが成立し、満たされない現実の生活を送るものと、彼等の目から見れば満たされた理想の生活を送る支配者との区別が明確となり、かゝる社会的事実の觀念的反映として、「支配者（甲）は被支配者（非甲）に非ず」「理想は理想に非ず」という概念が確立した以後のことであつて、それ以前の「民族そのものが神であつた」時代、すなわち現実の氏族生活そのものの中に、理想的な神の世界を把握した時代においては、現実 $\parallel$ 理想であり、甲 $\parallel$ 非甲であり得たことであろう、我々は今日においても尙「日本は敗けた、けれども実は敗けたのではない」という前矛盾律的確信を發見するわけであるから、まして古代において、甲 $\parallel$ 非甲、治水する者 $\parallel$ 治水される者、という思考法が行われても怪しむに足らず、かかる即融の心理こそが神話思考法の一特色であると考へてよいであろう。禹と黄河の靈とはそのダイナミックな点で一致するわけであるから、serpent worship を契機として融合する。

以上は禹の实体をその字義の面から考究したわけだが、しかし、禹の实体が虫であるという事が明確になつたとしても、それは直ちに禹の最も根本的な实体が虫であるという証拠にはならないかも知れない、例えば、素盞鳴尊の動物神としての实体が蛇であるにしても、尙この神には自然神としてすさぶ性格、すなわち、暴風雨神たる性格がある。そして、この暴風雨神的性格の方が、この神の、より根本的な实体であろうとも考へられる、その事は、スサノヲという発音の上からも推定されるのであつて、スサノヲとスサブという動詞との間には、神話の世界において、何等かの密接な關聯があつたのであらうと考へられるのである。

同様に、今度は禹の实体を、その発音の面から考へて見れば、更に文字以前の根本的なその实体がつかめないであらう。

うか。

禹はその音、王矩反であつて、之に属するものには宇、羽、雨、禹、及びその系統（郟、霽、禱など）がある。これらの中でこの説話に關係あるものは禹と羽である。この二字は現代北京音が同音同声であるばかりでなく（共に yü<sup>3</sup>）、清朝の古音家の説くところによれば、周秦の古音も亦、同部であつたという。

そこで禹は羽であるという仮説が考えられる、つまり、鯀は羽というところ（羽山、羽淵、羽郊）に至つてその役割をおえ（殛<sup>ニ</sup>於羽山<sup>一</sup>。入<sup>ニ</sup>於羽淵<sup>一</sup>。殺<sup>ニ</sup>鯀於羽郊<sup>一</sup>。——山海經——）、それに代つて羽<sup>ニ</sup>禹が登場して来たという事になる。それは例えば、八岐の大蛇（蛇神）が退場し、それに代つて素盞鳴尊（蛇神）が登場したのに似た形で、A'がそれに代つて登場するという事は神話的にも不自然ではない。

然らば羽とは何であるかという、鳥類の総称であつて、礼記月令の「孟夏之月……其神祝融、其蟲羽、其音徵」という羽がそれである。そこで、この神話の序幕の主演者は大魚であり、後幕の主演者は鳥であり、魚から鳥への推移が見出される。

そこで直ちに聯想されるのは莊子、逍遙遊の「北冥<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>魚其名為<sup>レ</sup>鯢<sup>ト</sup>、鯢之大、不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>其幾千里<sup>一</sup>也。化<sup>シテ</sup>為<sup>レ</sup>鳥、其名<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>鵬、鵬之背、不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>其幾千里<sup>一</sup>」という有名な説話で、鯢と鯢とは共に大魚の名であつて何等かの關係があると考えられ、それが大鳥と化したということは、鯀から禹への推移が鯀から羽への推移、すなわち、大魚から大鳥への推移であることの暗示になりはしまいか。もし、そうだとすると、鵬と禹とは同質の存在となるが、鵬の実体はアジヤ貿易風と考えられるから、禹の原始体もやはり、「アジヤ貿易風」ではなからうかということになる。（1）アジヤ貿易風↓（2）河川の氾濫↓（3）治水↓（4）国土の造成。は四者一体の密接な因果關係をなし、東南アジヤの東南アジヤたる所以を規定している基本的な四要素であるから、素盞鳴尊においてはそれが（1）暴風雨神（2）蛇神（3）治水神（4）出雲族の祖神、という形で一身に具現されているわけである。禹の場合も、その原始体をアジヤ貿易風で

あるとすれば、(1) アジヤ貿易風 (2) 龍神 (3) 治水神 (4) 夏王朝の祖。という形で、この四者が一身に具現されていることになる。(洪水は又、鴻水とも書かれ、古文獻では両者が互用されているが、鴻もまた大鳥の名である。) 勿論この推定は飛躍的であつて難点を持つてゐる。禹は元來、中国西方種族たる夏種族の保持してゐた神と考えられ、禹自身も亦、西方の神と考えられる。

禹興<sub>ニ</sub>于西羌<sub>一</sub> (「史記」六国史表)。大禹出<sub>ニ</sub>西羌<sub>一</sub> (「後漢書」戴良伝)

禹学<sub>ニ</sub>於西王国<sub>一</sub> (「荀子」大略篇) 等、

かかる西方地区は沿海地方から離れてアジヤ貿易風圏よりも寧ろシベリヤの大陸的氣候に支配される土地柄で、洪水とも比較的縁がうすい土地と考えられることが難点の一つである。

これについては禹の治水説話が果して本源的に、夏種族の土地に生れたものかどうかが疑問視され、又中国の東方民族 (殷<sub>いん</sub> || 夷<sub>い</sub> || 東夷) の説話が之に混入してゐるのではないかとも考えられる。後者については殷系の神、契 (殷の祖といわれている、禹とも書き、卜辞の文字が禹に似てゐる、舜が光明神であるのに対し契は黑暗神であり、その性格が禹に似た神である) の説話と夏系の神、禹の説話が混合してゐるところに、所謂「禹の洪水説話」の成立があるのではないかと考えられる (白川静氏説) 又、前者についてはこの説話の語根のどこかに、外来 (中国外) 要素が混入してゐる場合も考えられるわけである。そこで讀つてノアの箱舟型洪水説話の内、印度のそれを見ると Manu の洪水説話がある、今「神話学原論、上巻」(武村武雄著) により、Mahābhārata 所伝の説話を引用すれば、

偉大なるリシのマヌの慈悲心を試みた一神魚がマヌに教えて云う「世界の穢を淨むるため近く大洪水起らむ。宜しく箱舟を造り、一切のものの種子を携えて之に搭すべし。われ角ある動物となりて、汝を救うべし」と。やがて大洪水が起ると、果して有角の大魚が現われたので、教に従つて角に綱をかけると、魚は巨浪を凌いでヒマヴァート山の頂に泳ぎ着いた。水が退いた後、マヌは聖なる力によつて再び人間や諸々の生物を造り出した、と。



とあるように魚は箱舟型洪水説話の印度型において洪水の最盛期に現われるものであり、又、鳥（その典型的なものは鳩や鴉）は洪水の衰退期に現われるものである。洪水の最盛期に現われるという事は、之を（B）治水型におきかえれば治水に失敗するという事であり、洪水の衰退期に現われるという事は（B）治水型においては治水に成功するという事である。

かくて、禹の治水神話は、洪水の最盛期に魚が現われるという点においてノアの箱舟型説話の印度型と一致し、退水期に鳥が現われるという点においてその始原的な型と一致し、有徳者禹が夏王朝の祖となるという点において有徳者ノアが人類再生の祖となるという、その始原型と類似する、人類の不敬虔と神の怒りによる人類の消滅というような宗教的色彩が欠けていて、その代りに堯舜禹にからまる政治道德的色彩が濃くまつわつてゐるのは宗教的なセム族文化と政治道德的な漢族文化との相異の神説伝説における現われと考えてよいであらう。鯀とても元來は今日伝えられているような悪者ではなく、アダムと同じく上帝の元子で、たゞ洪水を防ぐために上帝に無断で息壤（生命の土）を盗んだため追放の憂目を見、羽山に殺されたのである（「墨子」「山海経」等）、この不面目を挽回し洪水を治めたノア的存在が禹なのである。この様に考えると禹の治水説話はノアの箱舟型の中国における無限の変型と考えられる。勿論、これも臆説に過ぎず、もとより之を固守する考はないが、たゞ、西方よりの伝播の可能性という点だけについて言えば、夏種族の居住地に接する河南省開封の考城、曹鼎、單臬下には青<sup>チン</sup>回<sup>ホイ</sup>回<sup>ホイ</sup>と呼ぶ古代のユダヤ人の後裔、約一千戸があつて、青桃<sup>チンタウ</sup>教なる教義を奉じている。これは、ユダヤ教の中国における変型と認められている。このような例もあるから、全然、否定することも出来ないと思う。

そこで今、仮にこの臆説が許されるならば、

禹の治水伝説

(B) 治水型 (I) 有徳者型

ノアの洪水系説話、

八岐の大蛇退治

(B) 治水型 (II) 英雄型

アンドロメダ型説話

という風に規定することが出来るであろう。

さて次に八岐の大蛇退治神話について一瞥を加えなければならぬ、この場合はこの神話を以つて治水説話と見なす事が果して妥当であるかということが先ず第一の問題であるが、便宜上、そう言う見方が妥当であるという仮定のもとに、この神話を復習して行くことにしよう。

素盞鳴尊が高天原より底つ根の国に追われたのは「時に霖降る、素盞鳴尊、青草を結び束ねて笠簔として宿を衆神に乞ふ」〔書紀〕、神代卷一書〕という青草のしける降雨期であつた。……天下つて出雲の国、簸之川上に降り、老夫婦が一人の乙女を中において泣いているのに会われた訳であるが、乙女の名は奇稻田姫、すなわち、豊穰なる稻田を人格化した名前である。老夫婦の名は足名椎、手名椎。古事記伝には「足と手を分けて父母に当てたるは意なし」とし、この名はクシナダヒメを撫でいつくしむ義より出たものとしている。或はナは屬格を示す助詞であつて、ツチは椎（ツツイ、ツチ）の義であり、足の椎、手の椎は、手足を椎の如く用うること、すなわち、人間の労働力を示したのかも知れない。

毎年一度やつて来て老夫婦の娘をくらう八岐の大蛇は「身一つに頭八つ尾八つ有り。亦其の身に蘿また檜、相生ひ、其の長さ谿八谷、峽八尾に度りて」〔古事記〕という怪物で、正に上流において多くの支流を集め、河口において再び三角州を作る肥の川、そのものの神格化であり、之を中国式に表現すれば九頭龍川という事になるであろう〔九頭龍川は、福井市近郊において日野川に合流して三國に注ぐ河川で、ひの川（靈の川）〕八岐の大蛇という關係に似たものを聯想させる、ここにも継体天皇が弓矢をもつて、九頭鬼を退治したという伝説が伝わっている、九頭龍と禹とは字義から言えは同義と思われる。〕

大蛇ヲプロチの語義については古事記伝には「名義。尾於杼呂智にて、尾のおどろおどろしきを云うなるべし、於杼呂は棘、驚などと同言なり」と説いているが、この説はいささか、おどろおどろしき説であつて、をニ尾、ろニ語勢

の接尾辞。とする説に従うべきようであるが、又、ワロはアイヌ語の Woro (山川、しめつた、の) から来ているのかも知れない。チは、オヤヂ、ヲヂ、イカヅチ (雷)、ミヅチ (蛟)、チチ (父)、チ (血、乳) のチであつて、靈妙なるものに与える接尾辞である。カミ (神) が Shamanism の立場に立つた靈格の称呼であるのに対して、チは Animism の立場に立つた精靈の称呼であるう、尙、カミ (Kami) はアルタイ人が巫子シャイタの称呼としてゐる Kam あたりと關係がある語かも知れない。(臆説)

この八岐の大蛇 (肥ノ川の河伯かみ) が毎年やつて来て奇稻田姫を食うという事は、毎年、降雨期 (梅雨期) に至つて肥ノ川の氾濫によつて豊穰なる稻田がそこなわれる事を意味するものであり、素盞鳴尊がテナヅチ、アンナヅチを指揮して八岐の大蛇を退治したという事は槌の如き道具を用いて肥川の治水をしたという事になる。

尊が大蛇の尾を切つたとき、室剣が出て来たので之を天照大神に奉つたのであるが、その剣の名が天叢雲剣というのは「古語拾遺」に「大蛇之上、常有<sup>ニ</sup>雲氣、故以為<sup>レ</sup>名」といつてゐる通り、梅雨期の曇天を象徴する名である。

尊は大蛇を退治した後、宮造みやつく作るべき地を求めて須賀すがの地に至り「吾、此地に來まして我が御心須賀須賀みこころすがすがし」と満足し、その地に須賀の宮を作つたとき、そこから雲が立ちのぼつたので、

彌雲やぐも立つ 出雲八重垣 妻籠つまかに 八重垣作る その八重垣を

という歌をよんだ。尊が底つ根の国に出発したのは「時に霖降る」という時節であつたが、梅雨ばれと共に治水工事が成功し、大地より水蒸気が立ち上つて、大気もすがすがしく、かしこの谷、ここの嶺より幾重にも雲が出で上つて行く、妻としていつくしむべき、かの稻田を優しくつつむかの如くに……」というところで、出雲の國の黎明とその祖神の成婚を祝福するこの説話は終つてゐる。

以上が、この説話の根幹であると考へる。

めいとよめ の神話といふのは Aston (William George Aston 1841-1911) の「日本神道論」以來種々の考証が試みられて來た。

或は高志こしの八岐の大蛇と素戔嗚尊との鬭争には越族と出雲族との鬭争が反映していると考えられ、或は奇稻田姫の姉妹の犠牲には荒ぶる水神の靈をなぐさめて、農作物の多産を祈る処女人身御供の習俗の反映が考えられ、宝剣が出た大蛇の尾すなわち、ひの川の上流、鳥髪山の地は、古來、砂鉄の産地として「鳥髪之河上宮に坐まして横刀卷千口ちくちを作らしめたまひ、是を石上神宮に納め奉りたまひき」(古事記「垂仁天皇ノ条」と見られるところであるから、大蛇退治の神話はその鉄山の争奪戦、その結果としての、稲田の争奪戦であつたろうとも考えられて來たわけである。

しかし、これら先人の諸説は、神話が古代文化の綜合的表現であるという性格を備えていることを考えるとき、必ずしも一を排し、一を肯定する必要はなく、反つてその相關性に着目すべきであると思う。

他族との鬭争と自然との鬭争とは、神話的思考法においては、必ずしも分離して考える必要はなく、例えばリグヴェーダにおいて、雷靈神インドラが、雲を押し隠し、降雨を妨げ(自然的災害)、水をせき止め、河の流水を断つ(人為的妨害)ところの悪竜ヴリトラと、毎年、季節風の時期において鬭争し、もしインドラの勝利が、いちじるしく遅れると、その年の收穫は旱魃のため駄目になるといふ神話は旱魃という自然現象との鬭争を語るものであると同時に、アリアン、インドと先住民族との鬭争をも反映しているものと考えられる。又、水神の怒をなぐさめ、收穫の多きを願つて多産の象徴たる少女を人身御供に捧げるとは、農耕集団と、その指導者たちの恐怖と希望との現われであると共に、指導者が支配者に上昇するためには、恐怖の対象たる水神をも遂には征服するという集団の積極的な作業を、個人的英雄の名において効果的に語ることが必要である。又砂鉄を利用して新しい生産手段を作り出すという事は、農耕集団の意識を高め、治水への積極的な意欲を振起すものであると共に、それは支配者にとつては専ら軍事的魅力であるが故に、高天原族の「勝利の詩」たる古事記神話において、砂鉄の産出↓農業労働生産力の向上↓治水の成功。という過程よりも、砂鉄の産出↓宝剣の出現↓素戔嗚尊より天照大神への宝剣の献上↓出雲族の高天原族に対する軍事的服従。という過程の方が、きわだつて辿られるのも亦、然かあるべき事と考えられる。要するに「八岐の大蛇退治」に關する諸種の解釈は、当時の日本に於ける最も先進的な農耕集団として他族を圧していた出雲社会の姿を何等かの形で解明している点において、それぞれ存在理由を持つているものであると共に、この説話の根幹をなすものは、やはり、治水であるという事実は認めらるべきであると思う。

以上によつて、日中の代表的治水説話に關する一応の考察をおえ、左に兩者の性格の異同を対照して見ると次のようである、

中 国 (禹)

(イ) 道德的政治的色彩が濃く、現実的歴史的性格が  
驗

(ロ) 名君型説話である、

「ノアの箱舟」型？

禹は酒を有害なものとして、しりぞけた

(ハ) 治水型である。

治水の規模が全国的でその成功に八年乃至

十三年を要している。

日 本 (八岐の大蛇)

(イ) 怪異性に富み、神話本来の性格をとどめている。

(ロ) 英雄型説話である、

「アンドロメダ」型、

3 W (war, wine, woman) から成る。

(ハ) 治水型である。

治水の範圍が地方的で、治水は梅雨期にはじまり梅雨ばれの頃に完成している。

(イ)の事實は、中国においては日本におけるが如く、神話が古代の支配者によつて組織化され、体系化されて記載される事がなく、その断片的な姿のみを留めているに過ぎない事を示している。言い換えれば、中国においては春秋末期より前漢時代にかけて、怪力乱神を語らざるを本旨とする合理主義的經典は成立したけれども、古事記、日本書紀の編纂の如き神話の体系づけは行われなかつた事を示している。この事は往々にして世人に「中国に神話なし」という觀念を抱かせる結果になつているが、中国のみがその数千年の歴史の過程において神話的段階を持たなかつたという事は考え難いところであつて、問題は正に、中国古代の支配者は彼等が文字を持つに至つた時、何故、大和の支配者のごとく、伝来の神話を自己に有利な形に取捨し体系化して之を記載化することに熱意を示さなかつたという処にあると思わ

れる。その理由を簡単に言えば、日中ではその建国の歴史的段階が相異していたからであり、言い換えれば、中国に神話なきは尙、アメリカ合衆国に建国神話なきが如しという事になるであらう。

中国にも神話が無いわけではなかつた、我が国の風土記に見られる様な断片的な形で現存しているばかりでなく、嘗ては天地の創造より、宇宙の統一、人類の發生、王室の光榮を物語る壮大な体系的神話が存在していたらうと考えられる。その王朝は殷であつて、殷朝はその始祖たる至上神として帝舜を仰ぎ、帝舜に直結し帝の恩恵を受けるものはその直系者たる殷王のみであるというところに、その神話の根幹があつた。前世紀の末葉（一八九八—一九九）、河南省安陽県なる洹河々畔、殷王盤庚が都したと言われる遺跡（殷虚）から龜甲や獸骨に刻した古代文字、所謂、卜辭が発見されて以來、中外の古代史家は殷虚文字を中心に、周代以後の鐘鼎文や古文獻、或は比較神話学等を参照し次第に殷人がその王朝の系譜の上を示した壮大なる神話大系の原形を闡明するに至つた。それによれば、殷王統は地上の高祖を唐トウの湯王となし、超地上トウ超自然の高祖を嚳となし、嚳はまた俊（スン）、嚳ともよばれ、すなわち舜である。舜（スン）は稷、農に通じ、あけぼの、あさひ、の義であり、嚳は暁に通じ、日の出の義であつて太陽神を意味するものと解せられる。すなわち、大和王朝トウと同じく日の神を祖神とする神話大系を持つていたのである。

しかし、殷王朝神話と日本神話が、その国の歴史の上に与えられた運命には大いに異なるものがあつた、それは日本ではその建国が神話的段階において行われたのに、中国ではその建国が形而上学的段階において行われたからである。

日本の建国は 高天原族に対する出雲族の屈從（大国主命の国譲）↓天孫降臨↓隼人族の屈從（隼人族の祖、火照命ヒテリノミコ）  
 海幸彦の神武天皇の祖父、火遠理命ヒトコト↓山幸彦への屈從）↓神武東征。という神話的過程で語られ、高天原族の直系的首上者が日本国の至上の治者であり秩序の源泉であるという超合理的觀念および其の觀念に支えられた現実の社会秩序が二十世紀にまで及んだ。かゝる社会にあつては、この建国神話はもとより否定さるべきものでなく現在の社会秩序を

絶對的なものとして權威づけるために、社会、人智の進歩に對抗していよいよ意識的に強調されるのが当然であつた。之に反し、殷朝神話は神話否定主義者である周朝によつて否定されねばならなかつた。

殷周交替は中国史上、東洋史上、最大の事件である。それは周の文化こそが中国三千年の歴史に決定的な支配力を示したからであり、周によつて中国の伝統の基礎が作られたからである。それは錢、鏹、及び犁、鋤など中国農業の基礎たる鉄製農具がこの王朝の末期において完成したことと対応する。

周が殷を亡ぼした時はカルタゴ最後の日の悲劇こそはなかつたけれど、尙、高天原族・天皇（神武天皇）。出雲族・皇后（五十鈴姫命）。という形で妥協的な講和を結んだ日本の事情に比すれば、確かにきびしいものであり、殷族に与えられた打撃はセム族の運命ほど苛酷なものでは無かつたにしても、尙、殷の持てる文化は一応は周によつて否定されねばならなかつた。

そして、この大事件は、政治的には祖靈的超人支配の時代より人間的伝統支配の時代へ、文化的には神話的段階より形而上学的段階への過渡期において行われた、周にとつては神話は不要であつた、社会は既に祭政一致の神意政治のみでは收拾し難い程、複雑なものになつていた、殷はそのために亡んだのである。その上、周は元來、殷のような壮大な神話大系を持ちあわせていなかつた。山東省より起つた殷の武力の前に、山西の故地を追われて西方に逃げのびた周には「勝利の凱歌」もなかつたし、又、偉大なるモーゼの物語を描くには、余りに質朴で地味な定着的農耕生活に安んじていたのである。かかる境地にあつて彼等はたゞコッコツと夢少き生活を営んでいた。彼等は現実主義者であつた。このコッコツと働く現実主義こそが彼等に漸次、再起の底力を与え、殷によつて軽視されがちな周圉の農耕集団の支持をあく、殷の東方経略の失敗の虚を突いて一躍、中原に覇をとなえしめたのであるという。彼等は美しい神話大系をととのえる暇もない程、言い換えれば支配者たるの光榮を四方に誇示する暇のない程、急激に勃興したのである、伝説によれば周の武王は父、西伯を葬う暇もなく、その位牌を持つたまま、戦陣に臨んだとの事である。

時代は既に神話的段階を過ぎ、周自身は殷ほどの優れた神話大系を持たず、しかも殷文化は否定されねばならぬ以上、殷文化の総合的表現である神話は当然否定されねばならないと共に、殷の神話に代るに周の權威を基礎づける新しい指導理念が確立されねばならない、それは農耕的現実主義者たる周においては当然、現実的なものであり、従つて超現実的な神秘性の薄い「コッコツと屈辱に耐えて勤めるものは遂に勝つ」<sup>11</sup>「天は自ら助くるものを助く」という意味での天の思想であつた。天の思想はその字形、<sup>天</sup>から見ても分るように、殷の帝の思想の超人的祖靈崇拜に對して、著しく人間的なものであり、規範的な理念としての天は、神話的思考法を克服した形而上学的合理主義精神の濃厚なものであつた。

しかし、周自身も完全に神話的段階を克服したわけではなく（それは、後次的なものであろうけれども、「詩」の大雅や周頌の内に彼等の神話の断片を見ることが出来る。）例え、周自身は一応これを克服したとしても、一方では周自身の内において、初周の進歩的精神の弛緩と反動があり、一方では周の支配力の拡大と共に、中心地たる黄河流域以外の、いまだ文化低く、尙、神話的段階にある呉、越、秦、燕の如き国々が周の支配内にはいつて来たとき、彼等を周の權威下に統一するには、やはり神話的方法をもつてしなければならぬという現実的な必要もあつた。そこで周人（及び小支配階級たる当時の知識人）は彼等の合理主義的、現実主義的意識をもつて、殷の神話大系を中心とする神話を再編成し、その再編成された神話大系の内に辺境民族をも抱合して行くという妥協的な方法をとつた。ここに自然神、動物神ならぬ聖人、堯舜禹を中心とする中国的な神話大系が成立し、この新しい神話大系の内にあつて周自身は舜の後であり、呉は泰伯（周の太王の長子）の後であり、越は夏の少康の後であり、秦は伯益（舜の臣）の後であり、燕は周公爽の後であるという血縁意識にもとづく統一的秩序を確立することが出来たのである。

かかる過程を経て半神話的半形而上学的な旧中国の正統思想は成立したのである、それは形而上学というには余りに神話的であると共に、皇國的<sup>12</sup>日本神話的なるものに比しては又、余りにも合理的人間的であつたが故に「いたくこち



ごちしきからごころ」として国學者達に拒否されねばならなかつたのである。かかる正統思想のくいちがい（それが非合理的であつたり、妥協的であつたりした処から来るくいちがい）が日中兩國をして、その深い文化交流にもかかわらず、最後の一线で融合せしめなかつた大きな原因であつたと考えられる。

次に異同表（ロ）及び（ハ）について一瞥を加えて見よう、この両項の比較において、我々は中国の方により典型的なアジアの社会の姿を見出すことが出来るであらう。

アジアの社会の特質を一般的に次の如く把握することが出来る。

大河の流域の広大な沃野を中心として発達したアジア諸國に於いては、農作物の收穫を確保するために、広大な地域における大規模な、従つて長期間に亘る治水灌漑事業が不可欠の前提であつた。而して、かかる大事業は個人的な作業や農村共同体の下からの力のみでは到底これを遂行する事が出来ない。それは上からの強大なる中央集權的な政治權力の干渉によつてのみ可能であつた。かかる事実がアジアの専制制度を成立させ永續させた、少くとも一つの原因であつた。

従つて、かかる地方では種族の耕地を確保、占有するために他の種族と鬭争するという事は、西洋諸國における程、重大な意義を持たず、巨大なる労働力を駆使して、自然の暴威を調和し、之を有利に利用する作業がより重要であつた。従つてここでは、自種族を指揮して他種族を屈服せしめる英雄よりも、自然の暴威より人類を救つたり、治水耕作を有利ならしめたりする有徳者（名君）の存在が重視される。

アジアの社会の特質を右の如く規定するとき、禹の治水伝説は（ロ）（ハ）の点において、正にアジアの社会の特質を典型的な姿で反映している説話であると言えよう、而してノアの洪水説話も亦、大規模な洪水を語る有徳者説話たる点において、アジアの社会が生んだアジアの説話であるという事が出来る（その後次的な型がギリシヤや北欧に存在するとしても）。従つて、禹の治水伝説がその具体的内容においてノアの箱舟型説話の系列に属するという事は言えないにしても、尙、兩者が共にアジア型洪水説話であるという共通性において、前者を後者の系列に属せしめるといふ試み

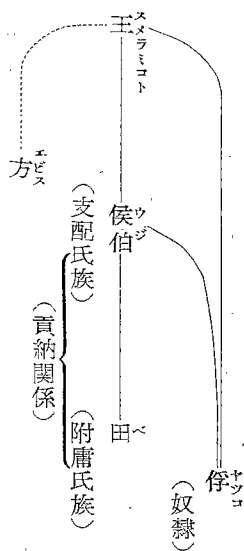
は全然無意味な企てとは言えないであらう。

之に対し、日本の治水神話はそれが当時に於いて最も先進的な農耕集団たる出雲族の開国説話として、全神話大系上においても、すこぶる重要な位置を占めているという点において東洋社会、すなわち治水耕作の社会たる日本の姿を如実に反映していると共に（イ）その治水作業が地方的規模において語られ、（ロ）その作業が短期間において終了し、（ハ）その型が英雄型である点において、典型的なるアジア型説話たる禹の治水伝説とは対蹠的であり、そこに日本社会の地理的条件が、根本的にはアジア的でありながら、其の内部にアジア的一般とは一致しない要素を含んでいるという事実の反映を見出すことが出来る。それは正に「日本は実際一つのアジアの色調を有した（小規模なる灌漑経済）が……」<sup>1</sup> という Whitfogel の言葉に対応するものであり、その周匝に多くの箱舟型漂流説話を持ちながら（朝鮮耽羅国の始祖説話。台湾の阿眉族<sup>あひま</sup>の始祖説話。今昔物語語卷二十六「土佐国の妹兄、知らざる島に行きて住む話」其他……）遂にノアの箱舟型洪水説話の如き大規模なる洪水説話を成立せしめず、反つてノアの箱舟型洪水説話に比すれば寧ろ西洋的色彩を感じしめるアンドロメダ型英雄説話としての治水神話を成立せしめた所以であらう。と言つて、それはもとより、日本における洪水が常に地方的小規模なものに限られていたという事を意味するものではない、或は数国にわたり、時には数道にわたつて水害を蒙つた事は、しばしば史書の伝えるところであり、又、古くより相当大規模な治水工事も行われていた事は、天平宝字五年、遠江国荒玉河堤の修築のために延人員三十万三千七百余名を役し、同六年、河内国狭山の池堤の決潰のため単功（延人員）八万三千人を使つたという史実によつても思いやる事が出来る。しかし、原則として我が国は河川が短小で、大平原もない關係上、広範圏にわたる大洪水といえども、地方地方で個別的に処理する事が一応、可能であり、比較的短期間にその功を収める事が出来るのがその特色であつて、水利についても同じ事が言える。この様な特色は地方的権力の権威とそその自立性を高め、中国などよりも容易にアジア的専制を克服して典型的封建制への道を開いた少くとも一つの原因であつたと考えられる。そしてアジア的専制、及び之と深い關係にあるアジ

ヤの奴隸制や村落共同体的遺制を中国に比すれば、より早期に克服して典型的封建制に移行し得たことが、引いては次の社会構成 $\parallel$ 資本主義社会への移行をも中国より容易ならしめた一原因となつたと考へるとき、兩國の治水説話に見られる(ロ)(ハ)の相異はやがて、日中社会の全歴史の相異をも規定して来た一契機を暗示しているものと考へられる。

翻つて思うに、出雲系神話は日本神話(高天原系神話、出雲系神話、筑紫系神話)の中で最も中国的ニュアンスの濃いものである。出雲系神話の特色としては(a)その神話世界が水平的であること。(高天原系神話が高天原 $\downarrow$ 葦原 $\downarrow$ 中ツ国を中心とする垂直的世界を重なる舞台としてゐるのに対して、出雲系神話が、出雲 $\downarrow$ 常世 $\downarrow$ 国 $\parallel$ 海外、朝鮮、を中心とする水平的世界を重なる舞台としてゐること)(b)蛇神(水神、雷神)崇拜の傾向の強い事(c)農耕的な祭祀儀礼が重要な地位を占めている事。があげられるが、これらの特色はまた、中国神話にも通ずるものである、(a)中国神話の世界が水平的であることは、彼の国の神話の代表的文献である「山海経」が「隋志」以来、地理書として取扱われて来た事実によつても其の一斑を察する事が出来よう。(b)蛇神崇拜に関しては、華北における天地創成神と推定される伏羲女媧が「伏羲女媧、蛇身而人面」(「列子」)と称せられているのをはじめ、人面蛇身、九首蛇身は、その例に乏しくない。(c)に関しては、後次的ではあるが社(土地の神)稷(穀物の神)の祭祀が宗廟の祭祀と並んで重視されたが如き、その由来するところは頗る遠く、且、深いものであつたと推定される。——もつとも、かゝる具体的な共通性については、反面、又、その相異性をも指摘する事が出来るであらうけれど、全体から受ける感じは、やはり兩者の近親性を想起させる。大國主命の如き、日本的に多血質乃至神経質であるよりも寧ろ中国的に粘液質である神が、この神話で重要な役割を演じているのも又、偶然ではない。そこにみなぎる二抹の暗さは、兩者が共にいち早く「万物の根源にして、暗黒の母なる大地」に緊束された生活態を反映せる神話であつた、ためであらう。

このように、両国の治水説話は似通つた雰囲気の中に発生したものであり、その上、両説話をはぐくみ育てて行つた当時の日中社会の構造も亦、大まかに言つて、ほぼ相似通つたものであつて、今、便宜上、その基本的な形を固定化して図示すれば



(王化ニ服シ切ラヌ独立的ナ氏族)

という風な形によつて示す事が出来るであろう。

以上のように、両説話は似通つた条件のもとに発生し、成長して行つたものであるのに、現存の姿は何故にかくも相異した相を呈するに至つたのであろう。その理由を一つ一つ詳細に究めて行くことは、この両説話が伝播關係に立つものでない以上、殆ど不可能な事であり、又、余り意味のない事であらう。ただ、その一面の理由として、両国の建国の事情が異なつていた点、及び両国の地理的条件が異なつた点について述べ、尙且、この二つの相異は、たゞに両国の治水説話の相異を規定するのみならず、又、その後における両国の歴史の進展の相異や、イデオロギーの相異をも規定した一因であつた事を述べたのであつた。

片仮名……………日本

漢字……………中国

( )……………説明

## 結 語

しかしながら、過去においてこのような相異があつたが故に、将来においても亦、永遠にこの様であると考えるのは、もとより誤つてゐる。かかる地理的唯物論や、歴史的宿命論は是正されなければならない。

もとより、アジャは地理的宿命的に「水の社会」ではあるが、しかし、我々は何よりも先ず、その間にあつて我々の先祖が、ただ洪水の恐怖の前に長嘆息するだけでなく、曲りなりにもその中から治水型説話を生み出すに至つた生活意欲の旺盛さに敬意を表さなくてはならない。なぜなら、アジャは「水」によつてあるのでなく、この面説話を生みだした積極的意欲によつてあるのだからある。それは大洪水の惨害にあえぎながらも、なお、神を見失なわず、神の恩恵による人類の再生を信じてノアの箱舟型洪水説話を生むに至つた人々の宗教的信念にも比すべき、たくましさである。我々は壮大なる禹の治水説話や八岐大蛇退治神話の中から、十分、そのたくましさを感じとることが出来る。

その上、アジャは今や洪水社会より治水社会を経て、利水社会へと發展しつつある。典型的アジャ社会たる中国における淮河の利水工事——一九五一年七月の第一期工事完成までに既に工事参加民工二百二十万を超え、幅各一メートルの土塼に換算して赤道を五周する堤防を築き、全工事完成のあかつきには五千五百万人の人口が永久に洪水の脅威より救われ、之にかわるに利水の恵を与えられるであろうと予測される淮河の利水工事こそ、利水社会へ發展の緒を開いたものと言えよう。

不完全なる治水社会より、完全なる利水社会へ。——その時、不幸なる「水の宿命」は反つて恵まれたアジャ再生への契機と化する。このような積極的意欲の前には、純粹封建制への移行が隣国よりスムーズに行われたとか、アジャ諸国より一歩先んじて近代化する事が出来たとか言うことは、部分的な歴史の問題に過ぎない。我々は中国及び四隣に対

日本、中国の治水説話

するこのような部分的な優越感を執拗に固守する事なく、アジアの一員として、治水社会より利水社会への大転換期に貢献する処がなくてはならない。かくてこそ、はじめ、禹の治水説話や八岐大蛇退治説話の内に示された祖先の積極的意欲は、今日的意義をもつて、新らしきアジア社会に生かされるのである。